©Mari Kusakari

大木 麻理

第3回

オルガニストの準備(じゅんび)

皆さま、新年明けましておめでとうございます。本年もミューザ川崎シンフォニーホールでは興味深いオルガン公演がたくさん予定されています！ぜひお運びいただけましたら幸いです。

連載『オルガニストの○○』も早いもので3回目を迎えました。今回のテーマは「オルガニストの準備」です。

パイプオルガンの最も特殊なところ、同時に魅力的なところは、その時に奏でる音を演奏者がゼロから作るということだと思います。もちろん他の楽器にも音色を作るという作業はありますが、オルガンの場合はこの音色を作る作業をしないと、鍵盤を弾いても全く音が出ない、つまり無音状態なのです。この音を作る作業を「レジストレーション」と言います。それは一つ一つ違った音色を持つストップのうち、どれを選択してどう組み合わせるか、まるでオーケストレーションのような作業のことを指します。

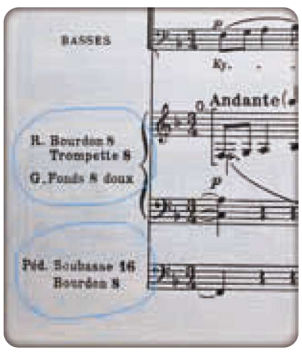
「レジストレーション」にはもちろん伝統的な手法によるものもありますが（作曲者が音色の指定をしている場合もある）、基本的には演奏者の個性に任されているところが大きいです。なにせゼロからのスタートですから、そこにはオルガニストの個性やセンスが素直に出るといっても過言ではありません。同じ作品を同じ会場のオルガンで何人かのオルガニストが演奏した場合、恐らくそのレジストレーションが同じになることはないですし、時として全く別の作品に聴こえたりするので面白いです。

しかし共通しているのは、対象とする音楽を素晴らしくするために、どんな音色が適しているのかを全てのオルガニストが真剣に熟考することだと思います。同じ素材を使ってそれぞれの料理人がいかに美味しく調理するのか……どんな過程、そして調味料を使うのかで完成するものに大きな差が生まれますよね。オルガンのレジストレーションも時に「レシピ」と言われることがあるほどです。

つまりこのレジストレーションの作業がオルガニストにとっては「準備」にあたるのです。弾くオルガンによってその組み合わせが大きく変わりますので、演奏会の度に膨大な時間を使ってこの作業を行います。あくまでも私の想像ですが、ひとつの楽器でここまで仕込みに時間がかかるのはオルガンだけではないでしょうか。楽器とそして空間と一人でひたすらに向き合う時間は孤独との戦いです。しかし試行錯誤の上に自分の本当に理想とする音色をオルガンが歌う瞬間が、オルガニストにとってこの上ない喜びなのだと思います。

個々のオルガニストが奏でるこだわりの音を、ぜひ聴きにいらして下さい！

[写真1]
写真2のレジストレーションを、ミューザのオルガンが持つストップで組んでみると……



[写真2]
M.デュリュフレの「レクイエム」の楽譜の一部です。この丸で囲んだ部分が、作曲者によるレジストレーションの指示です。

[写真3]
作品によっては、これほどたくさんのストップを選択することがあります。